月刊ナイトバグ　梅は咲いたか桜はまだか型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2011年 3月号
読切り作品
SS ：くろと
漫画：イリイチ/Step/
preudenano/
連載作品
SS ：悠奈
漫画：草加あおい/
クロツク/ぼこ
這い出す！バグアニ
啓蟄特集

月刊ナイトバグ　2011年3月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

3月号テーマ
啓蟄(けいちつ)特集
『あさ』 ADDA
蟲『おはよ!りぐるちゃん』

『 暁を覚えず 』　蛍光流動

二度寝して宵も覚えず。

『 啓蟄 』　キッカ

虫たちが元気になるよ！　やったねリグルさん！

『俺達の啓蟄はこれからだ！』　怒羅悪

「ご主人ー起きてくださいー」「ゑー、後五分・・・」
「さっきも言いましたよー」
というわけでもうちょっと寝ていたいリグルさんでした。それでは失礼しました。

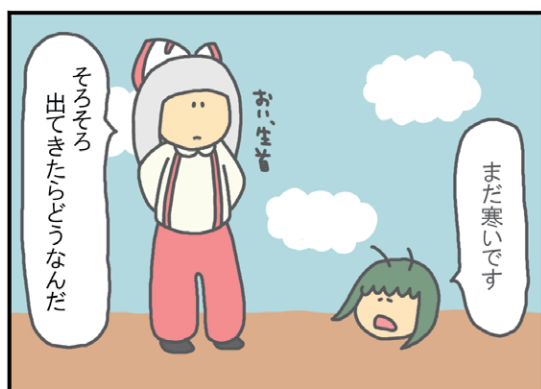
まだ寒いです
おい、生首
そろそろ出てきたらどうなんだ

土の中あったけー
慧音だ！
桜餅できたぞー！

むう…
いくらでもどうぞ
うまいうまい

うぎぎ
わ、私だって桜餅食べたいです！

リグルともこたんとけーね

ぼこ

読み方が分からなくて
ググった人は公式RT
preludenano
啓蟄【けいちつ】とは、
二十四節気の３つ目で
冬眠していた虫が
穴から出てくる頃のことだよ
啓蟄

ビールをのもう!
20歳未満の飲酒は
法律で禁止されています。

あたい知ってるよ！
この読み方知ってても
弾幕勝負の役に立たない
ことくらい！

啓蟄【けいちつ】とは、
二十四節気の３つ目で
冬眠していた虫が
穴から出てくる頃のことだよ

啓蟄

優先座席付近では
携帯電話の電源をお切りください。

カタン
カタン

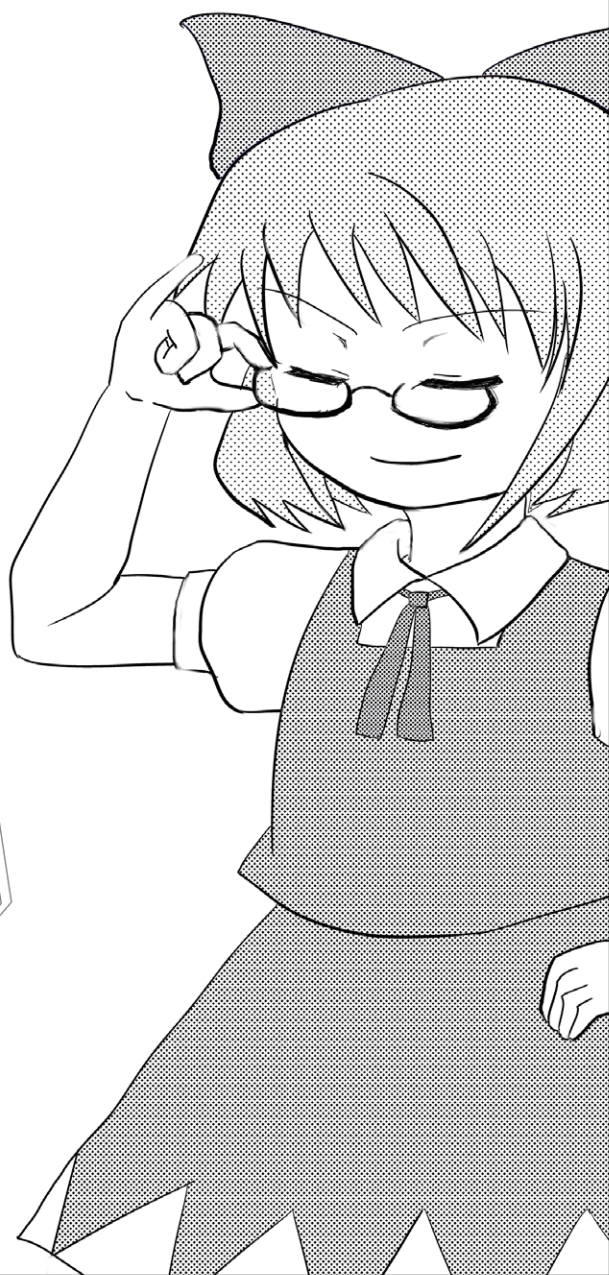
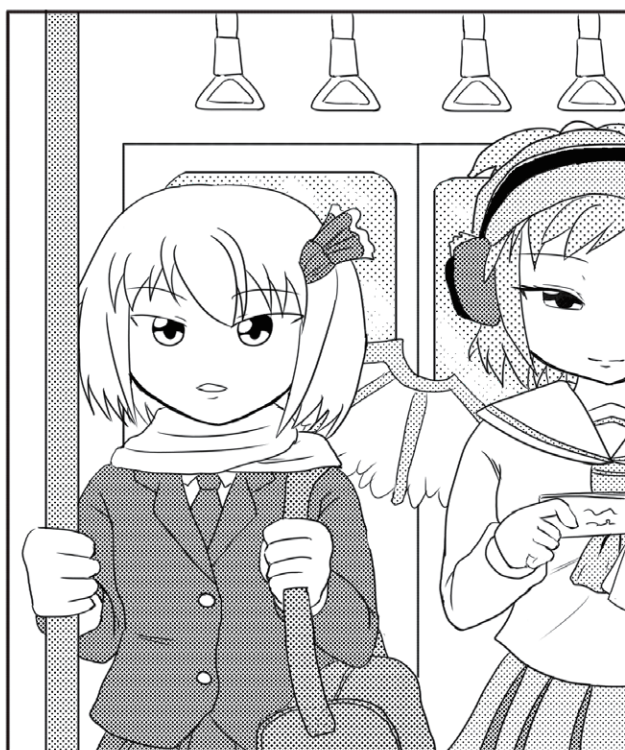
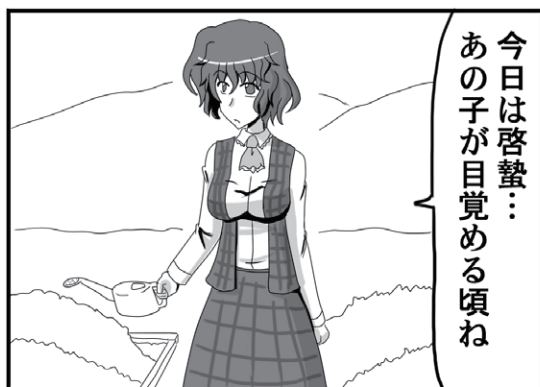
Fin.

リグルさん危機一髪

花畑の管理の手伝いも
してもらってることだし

うん、大丈夫。
自然に、自然に…

ガチャッ

リグル、起きたかしら？
朝御飯でも一緒に…

楽屋ウラ的何か。

番外編
〜通常版はどこいった？〜

描いた人
草加あおい

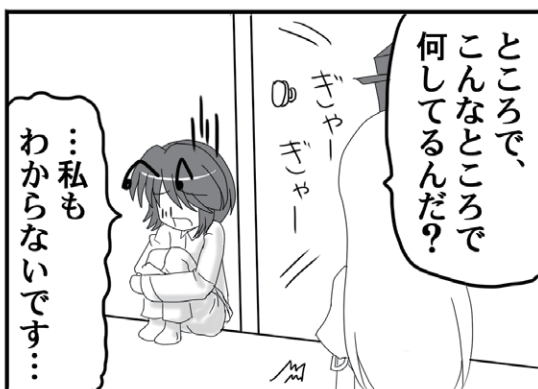
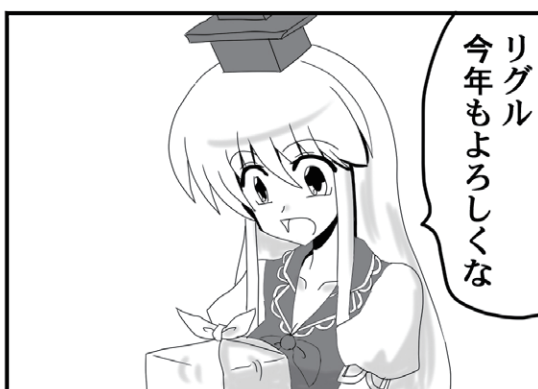
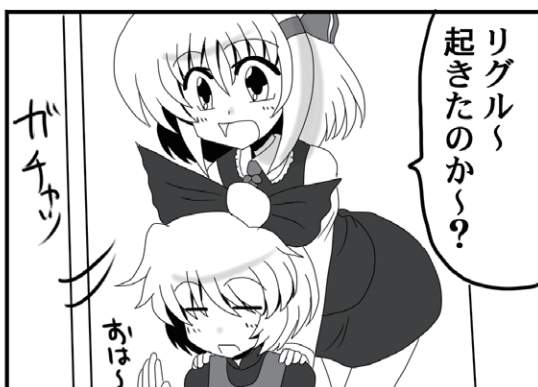
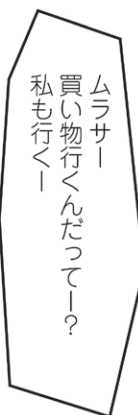
王子様にツッコミはないのか。

やっと起きたよリグルさん。

千客万来。

人が集えば宴会さ。

今のうちに終わっておく。

東方茶湾虫
「啓蟄」
クロック
ムラサー
買い物行くんだってー？
私も行くー
…分かった
分担しよう……
…私はジャスコへ
お前は刑務所で
あらぬ罪をつぐなってろ…
え？なにー？
愛が大きくて聞こえないー
フナムシ！
ムラサ！？
なに買うの？
なに買うのー？
…晩御飯の
おかずと……
…お前を永久に
閉じ込めておく檻か……
やだー
ムラサだいたーん！
……
…いっそ沈めて
みようか……
キャッキャッ
プスー
死ぬ！
ゴキジェットは死ぬ！

…船の上で
挙式をあげよう！
はっ!?
タなんとかニックで
派手にいこう
ドキドキ
それ泥船だから！

……すまない
つい…昔を思い出して…
…こっちには
その……海がないから…
そうなんですか…
フナムシ呼ばわりしておいて
そういう問題じゃなくね？

…おわびにお前に
テトラポットを献上したいが…
…すまない
描写がわりとめんどくさい
いや、もういいから！

あと…
フナムシってな…
別名
海のゴキブ
なんなのこの人

蟲カゴ

～ Compensation to fantasy ～

著者：悠奈

〈あらすじ〉幽香の花畑でリラックス出来たリグル。しかし、リグルが眠っている間に口内に毒虫を入れられていた。それに幽香は気付き、排除した。

「そこに居るんでしょ。隠れてないで出てきなさい。」

幽香が窓を開き、外に向かって叫ぶ。リグルは幽香から少し離れた所で窓の外を見つめる。しかし、リグルの眼には誰も映っておらず、ただ花が風になびいているだけだった。その時、幽香の前方の花がガサッと音をたてて揺れたかと思うと、何か黒い影が家から反対方向に跳ねて逃げているのが見えた。

「っ！逃がさない！」

その様子を見て幽香は窓から身を乗り出して追いかけた。リグルは反応する事が出来ず、呆然と立っていたが、暫くしてハッとし、玄関の扉を開けて急いで追いかけた。

リグルは駆け足で追いかけるが、幽香の姿は既に見えず、走って行った方向へ向かいながらキョロキョロと辺りを見渡した。周りには花と山しか見えず、人影は見当たらなかった。

数分後、リグルの前方にボロボロになり、尻餅をついている人影と、その横で傘を突きつけて立っている幽香の姿が現れた。リグルが小走りでかけよる間に、幽香は傘の先から鋭い光を放つ。その光は人影の左胸に突き刺さり小さな穴を開けた。リグルは人影の人物の顔が見える場所まで近寄る。座り込んでいた人は自分の知らない妖怪だった。左胸に穴を開けられたからは血が溢れていた。リグルは顔をあげて幽香の顔を見る。その眼には今まで見たことのない恐ろしい何かが宿っていた。

座っていた身体を支える力の無くなった妖怪が花畑に崩れる。その衝撃で花びらが何枚も宙を舞い、ゆっくりと落ちていった。そして妖怪の身体は白く光り、白い球体が何個も現れた。それらは全て幽香に吸収されていった。その瞬間、幽香は恍惚な表情を浮かべていた。

「幽香さん……この方は？」

光が全て吸収された後、リグルは顔をあげ、おずおずと幽香に尋ねた。

「地底に住んでいた妖怪の一人みたいよ。なんでも病原体を操る事が出来るとか。それで、異変が恥じまってすぐに地底の住民全てを猛毒性の病で殺めた。と言っていたわ。」

「病原体……」

リグルはさきほど口内に居た虫を思い出す。

「でも、もう大丈夫よ。花畑と私達に害をもたらす者は何も居なくなったわ。」

幽香が微笑みながらリグルを見つめる。その表情にはリグルによくわからないが不快な気持ちを与える表情だった。そのせいか、リグルは自分でも気付かない内に後退りしていた。その様子を見て幽香が不思議そうな顔を

する。
「どうしたの？早く家に帰りましょう。貴女は私が守ってあげるから……」
幽香が手をスッっと伸ばす。リグルはその手に自分の手を伸ばす事が出来ない。
「……どうしたの？」
幽香の顔が強張る。リグルはビクッと身体を震わせる。幽香には先程からリグルに恐怖という感情を与える何かが潜んでいた。幽香の目つきが鋭くなる。リグルはその勢いに怯え、震える手を幽香に伸ばす。手と手が重なった瞬間幽香がリグルの身体を一気に引き寄せる。
「どうしてそんなに怖がっているの？私は貴女を傷つけないわ」
幽香の顔が眼前に迫る。リグルは幽香の眼をまっすぐに見れなかった。見たら吸い込まれ、二度と離れる事の出来ない。そんな錯覚を覚えてしまったからだ。
「……怯える必要はないわ。貴女が望むことは何でもしてあげる。大丈夫よ」
幽香が耳元で囁く、リグルはかかる息にぞくっと身体を震わせながら幽香とは眼をあわさない。
（いやっ。離して！）
「どうして嫌なの？どうして離してほしいなんて考えるの？」
リグルは眼を見開いて幽香の身体を突き放した。いきなり突き放された幽香は戸惑いの表情を浮かべて固まっていた。

「どうして、私の考えていた事を……」
リグルは震えながら尋ねる。
「さっきの子、アノ子。地底にある地霊伝の主をも殺めていたみたいよ。それで、私はその魂を吸収して、触れた相手なら心、感情くらいなら読めるわ。だからね、私は貴女のしてほしい事も何となくわかるの。貴女に不自由無い暮らしも提供できるわ。何より私は貴女を裏切らない。だから、ね」
幽香が再び手を伸ばす。リグルは幽香の最後の言葉に惹かれていた。
——裏切らない
チルノに誤解され、魔理沙はアリスに裏切られ、アリスは私を殺そうとして……。今のリグルにはその言葉が魔法のように心地よかった。誰かの傍に居られる。ずっと信用して生きる事が出来る。なんとも落ち着き、うれしい事なのだろうか。
リグルは気がついたら幽香の手に向かって自分の手を伸ばしていた。もうすぐ幽香の手に触れる、と思った時、何かがリグルの手を止めた。
——チルノが悲しんでいる。仲直りしてほしい
自分の中に眠るミスティアの言葉。親友との約束。それがリグルを悩ませ、止めた。
（そうだ、チルノ。ミスティア……）
いきなり止まって考え込むリグルを見て幽香はきょとんとした顔でみている。
「どうしたのリグル？」

「幽香さん……ごめんなさい。幽香さんの言葉はうれしいですけど。私は、友達を救わなくてはならないんです。ですから、ここで立ち止まるわけには……」
そう言った瞬間、幽香の微笑みがおぞましいモノへと変化した。
「なんてこと……私は貴女の為なら何でもするというのに、貴女は他の人の為に……」
ぶつぶつと狂ったかのように何かを呟きながら傘の取っ手を握ったり離したりを繰り返す幽香。
「……仕方ないわね。そうよ、ならば、私が、私の中で守ってあげるわ。貴女が何も考えなくていいように私の中で。貴女が何も考えなくてていいように私の中で守ってあげるから。だから——」

幽香が傘をリグルに突きつける。先程妖怪に傘を突きつけていたのと同様に突きつけている。そして幽香の口から小さく言葉が漏れる。
——ちょっと死んで。
リグルの目の前に光が現れる。リグルは眼を瞑る。眼を閉じた時、最初は黒が広がったがすぐに外の光が眼を瞑っていても入りこんできた。真っ白な世界が広がる。
——馬鹿！あきらめるな！
聞き覚えのある声が聞こえる。それと同時に白い世界が赤く変わった。
（この声は……！）
リグルが眼を開ける。そこでは幽香の傘が赤々と燃えていた。炎の中に傘を握っている手が見えた。その手の主にリグルは視線を移

す。
「妹紅さん！」
　そこには数日前に別れた妹紅の姿があった。
「ったく、慧音の時もそうだったが、危険と思ってすぐ諦めて目瞑るのは止せ。」
　妹紅の手にあった傘が真っ黒な炭となった。二度と傘として機能しなくなった炭を横に投げ捨てて、幽香を見据える。
「さてさて、私の友人が色々とお世話になったみたいだね？」
「……ええ。怪我の手当てから色々な事をお世話させてもらったわ。」
　幽香はにっこりと微笑みながら傘が燃えた時についたスカートの汚れをポンポンと叩いて払う。
「そして、これからもずっとお世話するつもりよ。」
　幽香が目つきを鋭くして妹紅を睨みつける。
「お生憎様、彼女はまだ一人で食事も排泄も出来る、非要介護妖怪よ。貴女のようにお年を召していませんのでね。」
　妹紅は動じず言い返す。その言葉を受けて幽香の眉がピクリと動く。
「……遥か昔に永遠を手に入れた蓬莱人のおばさんには言われたくないわねぇ。」
　幽香は両手を顔の前に組んでですり合わせながら答える。それを聞いて妹紅の表情が強張る。
「ふふふ……」
「あはは……」
　妹紅と幽香の間に尋常でない空気がはりつめているのがリグルでもわかった。
「リグル！」
　いきなり妹紅から声をかけられてリグルはビクッと肩を動かし、驚いた。
「コイツは私が片付ける。その間に何処か隠れていろ！」
「で、でも……前みたいに……」
　フランドールの時のように危険な状態にさせたくない。それがリグルの本心だった。妹紅はそれを見透かしたかのように笑いかけて握りこぶしをリグルに突きつけた。
　――大丈夫だ
　言葉にはしないけれど、リグルはそう言われた気がした。そしてそれはうわべだけの言葉よりももっと信用出来た。だからリグルは後ろを向いて走ろうとした。その姿を見て、幽香が素早くしゃがみ、地面に手をつく。その瞬間、幽香からリグルまでに生えていた頭の垂れた花がピンと地面と垂直に伸び、リグルの足に絡まった。
「わっ!ぶっ!?」
　それに気付かず、リグルはいきおいよく走ったが、足が縛られていて動く事が出来ず、顔面から思いっきり地面に倒れてしまった。
「リグルっ!」
　リグルの声と倒れる音を聞いて妹紅が振り返りリグルを見る。その時出来た隙を幽香は逃さなかった。幽香の足元から白い光が現れて妹紅との距離を縮める。妹紅はすぐに幽香の方に向いたが既に遅く幽香の右腕が妹紅の顔面目掛けて伸ばされていた。
「くぅっ！」
　咄嗟に防御に回る妹紅。第一手を受け止められた幽香すぐに身を翻し、次の攻撃に移る。妹紅は反撃する間も無くただ受ける。立て続けの攻撃で幽香の手が白く光る。それに気付き、妹紅はハッと眼を見開くが、なす術も無く攻撃を腕で受け止める。
「っ――――！」
　ミシリ、と鈍い音が妹紅の耳には入ってきた。それと同時に自身の腕が今までの攻撃の数倍に値する激痛が走った事がわかる。
「ふぅん。流石地底の鬼の怪力ね。噂に違わぬ威力だわ。」
　激痛に顔を歪める妹紅を見て笑顔を浮かべながら腕をブラブラと振る幽香。
(まぁ、その力のせいで私の受ける反動も半端じゃないわね。鬼みたいに鍛えて無いし……多用は出来ない、か)
　幽香は力を使った反動の痛みを堪えながら、もう一方の手で腕を抱えて苦しむ妹紅に振りかぶった。妹紅はそれを横に転がってかわし、体勢を整える。幽香は隙の無い動きで妹紅を追って振り返り、攻撃する。妹紅はそれを避け続ける。
(くそっ！腕が痛む……動きが少し鈍くなっ

てるのはレによって体力を消耗したからか？だとしても、何時アレが再びくるかわからないからコイツの攻撃は受け止めれない……）

　妹紅は一切攻撃を防御しようとはせず、回避に徹した。幽香は執拗に攻め続け、隙を伺う。

　猛攻の中、二人の周りに紫色の霧が現れる。妹紅はその霧に気付いていない。だがその霧は妹紅の身体に纏わり、動きを鈍くしていく。妹紅がその霧に気付いたのは数秒後、そして、理解する。この霧が毒で自分の動きを鈍くしているということに。

　その時、妹紅に動揺が生じた、そして出来た一瞬の隙。幽香はそこを逃さず正面から手を白光させて振りかぶる。その一瞬に幽香と妹紅の眼が合う。幽香の満面の笑み。妹紅は幽香を睨みつけて笑う。その一瞬を妹紅は捕らえた。妹紅の身体が白く光り、須臾の時を得た。

（輝夜っ！）

　妹紅は幽香の顔を両手で鷲掴みにする。しばらくの時間が経過した。妹紅の時間得た時が終わる。幽香はいきなり顔を掴まれて混乱する。妹紅は幽香の眼を睨みつけて離さない。

「っ！？」

　妹紅の眼が白光し、赤く鋭く光る。赤い眼が幽香の眼を捉えた。次の瞬間、幽香の眼の前が真っ赤に染まった。そして――

「きゃあぁぁ！？」

　幽香が両手で顔を覆い隠し、絶叫する。その隙に妹紅は幽香の側頭部を殴る。幽香は吹き飛び倒れる。その隙に妹紅はリグルの方に振り返る。妹紅と眼があってリグルはハッとする。二人にとっては長い時間だったが、リグルにとっては数秒の出来事のように思えた。

「妹紅さんっ！」

　リグルが叫ぶ。妹紅は眼を押さえ、フラフラとした足取りでリグルの方へ歩く。

「も、妹紅さん！大丈夫ですかっ！？」

「大丈夫……だ。他人の能力ってのは適応してない奴が使うもんじゃないな……負担が大きすぎる。」

　ゆっくりとリグルの元へたどり着く。妹紅は振り返って幽香の様子を確認した。幽香は頭を押さえて嗚咽を漏らしている。

（私のかけれる幻覚はせいぜい数秒、もう切れてるとは思うが……精神のダメージが残ったか？まぁ、どちらにせよ好都合だ。）

　妹紅は眼をつぶり、眼頭をギュッと押さえて離す。眼の痛みが少し和らいだ。眼を開くと、ぼやけた視界がだんだんとはっきりしてくる。そして目の前のリグルを確認すると、足元に絡みつく花を燃やす。

（それにしてもまだ頭がフラフラしやがる……須臾の時間ってのに慣れてないのがこんなに負担にかかるとは……）

　しゃがみこんで頭を押さえる妹紅の様子を心配そうに見つめるリグル

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ……少しフラフラするだけだ。」

　心配するリグルを手で制して立ち上がる。幽香の方を見ると、彼女も意識を取り戻したらしく、片手で顔面を押さえながら立ち上がっていた。

「妹紅さん。幽香さんが……」

「……ああ。」

　二人は花畑の中から立ち上がる一人の妖怪を見据えて構えた。

◇

　あたり一面の花畑で、少女達は踊る。踊る。自らの内に眠る魂と共に戦う。

　一人は約束の為。一人は守る為。一人は自らの乾きを埋める為。

　少女達がステップを踏む度に花びらが宙を舞う。少女達がぶつかりあう度に紅い花も舞い散る。

　蟲が飛び交い、炎が辺りの花を燃やし、花びらが飛び散る。

　二対一の戦い。どちらが有利なのかは誰が見てもわかる。いくら魂を多く所持していても、上手く本人と魂が適合し、扱えなければ意味は無い。

　少女達の舞踏はフィナーレを迎える。

◇

少女達が立っている。皆傷つき、身体中に紅い染みがある。一人の少女が走る。それにつられてもう一人の少女も走る。最後の一人は動かない。否、疲弊してしまって動けない。少女が手に炎を纏って立っている少女に攻撃を与える。防御をするも、疲弊して全てを受けきれずふらつく少女にもう一人の少女が追撃し、少女は崩れ落ちた。

少女が地面に倒れると周囲の花がふわりと舞って少女の上に被さる。花で彩られた少女は美しい微笑みを浮かべていた。

「……」

幽香が動かなくなったのを見て歩み寄るリグル。それに気付いた幽香は頭だけ動かしてリグルに向かって微笑む。

「リグル……ごめんなさいね」

「幽香さん……どうして……」

幽香は微笑んだまま視線を空に移す。

「寂しかった。昔巫女達と無茶してた時以来、ずっとこんな山奥で一人暮らしていた。人里に行ったこともあるけど、すぐに人里の守人に眼をつけられちゃうし。花が一杯咲いた時、やっと妖怪が来たけどそれ以来。ずっと一人よ。そんな中、偶然迷いこんで来た妖怪が居たわ。しかも花と共存関係の蟲だったわ。私はうれしかった。けれど、こういう時どうしたらいいかわからず無愛想にしてても、貴女は時々顔を見せに来てくれた。表には出さないけど。それが嬉しくて……」

「……」

幽香の顔が歪んで眼から涙が溢れる。普段は冷静な表情をしていて、決して涙なんて見せない幽香のその一面にリグルは胸が締め付けられた。

「一人で生活するのが当たり前だった。でも、誰かと居る楽しさを知ってからはもうダメ。私の何かがそこで崩れ落ちたわ。それと同時に、幸せを知った。今回の異変の時も、貴女の事をずっと心配してた。貴女がここに来て本当に嬉しくて安心したわ。そして誓った。ずっと護る、と。でも、貴女は行くと言った。私はそれを止めたかった。そんな時思いついた答えがこんな事しかなかったの……。ただの私の我侭で、色々な人を傷つけたわ。貴女を護る力が欲しかったから死神をも殺めた……。」

そこまで言って幽香が咳き込む。口から鮮血が飛び散った。

「もう……ダメね。本当に、ごめんなさい。とめてくれてありがとう」

すっ、と幽香の眼が閉じられる。リグルはしゃがみこんで幽香の顔を見つめる。幽香は今まで見せていた作り物の笑顔ではなく、本物の笑顔を浮かべていたのがリグルにはわかった。

リグルは眠る幽香の唇に自身の唇を重ねる。微かに幽香の顔が震え、一筋の涙が流れた後、幽香は動かなくなった。

リグルは唇を離し、自分のマントを幽香の身体に被せた。

「……」

リグルが立ち上がると幽香の身体が白光し、数個の球となり、リグルに吸い込まれていった。

「……ああ」

全てがリグルに吸収された後、リグルは理解した。幽香がどれだけ本当の気持ちを隠していたのか。

自然とリグルの眼から涙が溢れた。

「……行こう。」

妹紅がリグルの背を押す。リグルは頷き、歩き始めた。

(……妹紅さんが信用出来るかなんてわからない。でも、もう裏切られたくない。信用したい。妹紅さんも慧音さんの事がある。きっと、同じ気持ちだ……)

リグルは振り返らず歩きだした。

花畑では花がゆらゆらと風に身を任せてただ揺れていた。

◆

少女が森を歩いていた。行くあても無く、ただ歩いていた。時折立ち止まっては自身の胸に手を当ててぶつぶつと呟いていた。

「魔理沙……大丈夫。ちゃんとここに居るわね……」

少女、アリスはリグルを追うのを早々と諦め、森の中を歩き回っていた。

「魔理沙?」

アリスとは違う、幼く無邪気な声がアリスの背後から聞こえた。アリスは振り返り声の主を見る。
「……ああ、貴女ね。どうしてこんな所に居るのかしら？」
「魔理沙を探しに来たの。皆壊れちゃったから、魔理沙はきっと遊んでくれると思って。」
「魔理沙、この森の中に住んでるんでしょ？」
「ええ、確かにここに魔理沙の家はあるわ。でも、今は誰も居ないわよ。」
「ふーん。魔理沙おでかけ中？神社かな？でもさっき神社には誰もいなかったよ？」
疑う様子も無く素直にそう尋ねる少女にアリスの口から笑いが漏れる。
「どうしたの？急に笑って。気持ち悪い」
「いやいや、あまりにも面白い事を言うものだから。教えてあげるわ。魔理沙はココに居るわ。」
そう言ってアリスは笑いながら自分の胸を両手で押さえる。
「……？」
少女は顔を横に傾けて数秒考えた後気付き、ビクッと肩を震わせる。
「そっか……魔理沙も壊れちゃったんだ……なら」
寂しそうな表情をしてうつむきぶつぶつ呟く少女。それを見てアリスは勝ち誇った顔で笑う。
「魔理沙はずっと私と一緒よ。私と一つになったの。」
「うん……そうしよう。そうしよう。」
アリスには聞こえない小さな声でぶつぶつ呟く少女。
「あら？悔しい？悔しくて声も出ないかしら？あはは！」
そう言った直後、少女は一気にアリスに駆け寄り腕を掴む。
「どかん」
少女がボソリと言った瞬間、掴まれたアリスの腕がはじけとんだ。
「えっ……ひっ！？」
アリスは顔を真っ青にして眼を見開き腕を見つめる。
――ない、ない、ない。私の腕がない！
あまりの衝撃に言葉に出来なかった。痛みを感じる暇すらなかった。気がついたら腕が無くなっていたのだから。
「……が持ってる……奪うもん……」
少女は小さな声でそう呟いてアリスのもう片方の手を掴む。
「ひっ！？ひゃあぃ！？」
アリスは無我夢中で叫び、少女を振り払おうとしたが、既に腕が無くなっていて、腕を振る事も出来なかった。
「あっ、あああぁぁぁ！？」
痛みは無かった。そのはずなのに自分の腕が見当たらない。その奇妙な感覚にアリスは混乱し、怯え、動けなくなった。
少女は動かないアリスの頭を両手で掴んで顔の前に引き寄せる。アリスは先程までの余裕の表情等微塵も無く、この世のモノでない何か恐ろしいモノを見る眼で少女を見つめた。少女の顔が眼前に現れ、アリスの表情は凍りついた。
「貴女が持ってるなら。奪い取るもん。」
少女の小さな声がしっかりと聞き取れた。その内容が理解するか、その前にアリスの身体がはじけとんだ。
「魔理沙……」
アリスの居た場所に現れた光球を見つめて少女は涙を流す。
「もう……遊べないんだね……でも」
光球が自分の胸の中に吸い込まれたのを感じて少女は笑う。
「これで、ずっと一緒ね！」
少女は涙を流しながら空を仰ぎ、狂ったように笑い続けた。

（つづく）

〈作者コメント〉
また一月空いてしまいました…。裏切られるなら信用したくない。でも人を疑いたくないという葛藤

小旅行

著者：くろと

リグルは近ごろ、小旅行に出かけていた。というのも彼女から書簡が配達されて、判明した。私は、屋台でヤツメウナギを炙る傍ら、その便箋を読み耽るのである。

よると旅行したのは温い地方である。そこで宿を取って、休んでいた。旅館の近隣には彼岸桜が、その蕾を芽吹かせている。リグルは、日中を寝過ごすか、彼岸桜を日和見するか、時折思いついたように、ぶらぶらと山中を散策していた。もっとも、ある一つの運命的な出会いを果たしてからは、その怠惰な生活が一変している。

リグルが繁々しい森を散策していた時、偶然にも足を怪我した妖精に出会った。リグルよりも背丈が幾分低く、くるっとした眼をしており、頭髪は陽光の当て方次第で桜色に染まって見えた。リグルは、痛々しい足に応急処置を施術し、優しい言葉を二、三喋って、慰めた。そうして助けた妖精は、リグルに向かって、懇切丁寧にお辞儀をした。リグルは宿に戻ると、その出会いを記憶に留めており、幾度と思い出しては、悶えた。

次の日、散歩がてらに出逢った場所に赴き、妖精が来ないかと、五、六分とうろうろし、気落ちして帰った。気分が落ち込むと、それが天候にも伝わるのか、その夜は洪水のような雨が降り頻った。

散歩が習慣と化したころ、リグルは、川岸で妖精と再開した。

妖精は、薄緑色のワンピースに桜色のストールを羽織っており、靴を履いてなく、素足を流れる清水で洗っていた。素足は、膝から下が泥だらけになっており、泥遊びで遊んでいたことが窺える。リグルは、右手を挙げて、軽く挨拶した。妖精は、先日のお礼を述べて、またもお辞儀する。リグルは、いいよ。とそれを止めさせた。

ふと、リグルは、川に魚が泳いでいることを目聡く発見し、それを妖精に訊ねてみた。妖精は頷き、種類は少ないけど、魚が釣れるのだと説明してくれ、釣具はあるのか。と聞き返してきた。リグルは、宿にあったはずと思い出し、頷くのである。そうすると妖精は破顔し、明日にも一緒に釣ろう。と提案してきた。リグルは快く約束し、その日を後にした。

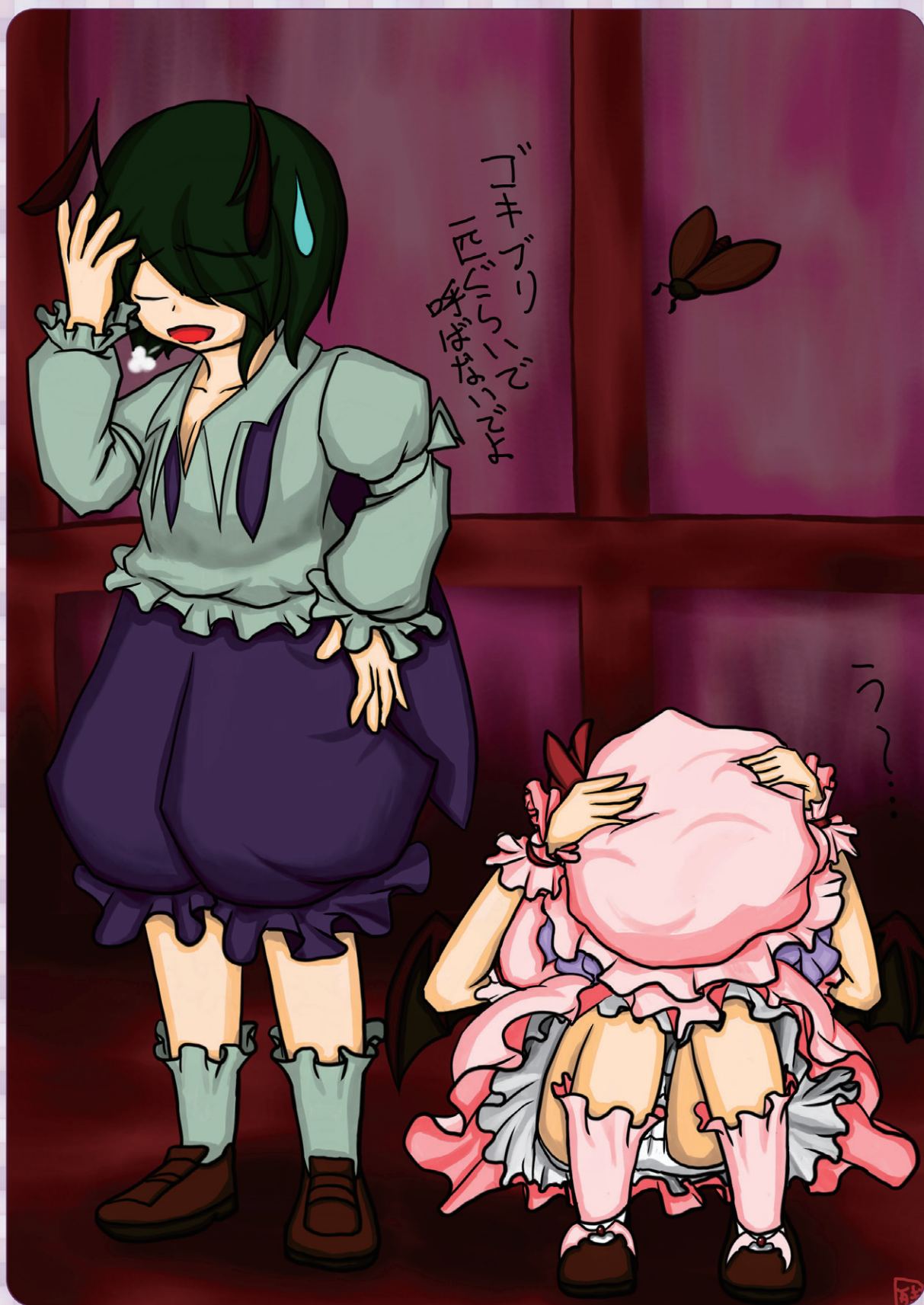
あくる日、リグルは釣竿とバケツを手にして、約束した川岸へと向かったのだ。到着すると、すでに妖精は釣りをしていた。リグルは、彼女の隣に立ち、釣り針に疑似餌を付けて、水面へと投げ入れた。一〇分か二〇分。それだけの時間が、長いくらい流れて、やっと竿が、引いた。最初に食いついたのは、妖精の釣竿だった。彼女は、それほど力を入れずに、川から淡水魚を釣り上げた。水中から岸へと打ち揚げられて、呼吸が出来ない川魚は、びしゃびしゃと跳ね回っている。妖精は誇らしげに胸を張り、リグルはちょっと口惜しそうに笑った。それを確認した妖精は、川魚から仕掛けを外して、もとの川へと放流し

たのである。あとは、いつまでも待ちぼうけていた。
　釣りから翌々日、天をも別つような豪雨が、雷鳴を轟かせて、大地にあまねく降り注いだ。雨が晴れると、リグルは特に用件もないのに、出会った場所へと向かっていた。また妖精に会えるかもしれない、という淡い情緒から、どうしようもなく突き動かされた行動だった、結局は誰にも出会えなかった。
　しばらくして、帰省の朝が近づいていた。リグルは名残惜しそうに宿から出ると、来週にも咲き誇ろうとしていた彼岸桜が、枝葉から折れているのを発見した。開花しかけた蕾は、無残にも泥水に沈んでいる。それらに同情しながら、リグルは帰ったのだ。
　便箋を読み終えると、ヤツメウナギが食べごろに焼けていた。

（終）

〈作者コメント〉
　本当に書きたいものというのは、書いている最中、自然に湧いてくるといいます。そうして自然に湧かせた結果、こうなりました。

『┗(蛍)┛』　非常識

バグバグバグバグバグ

『 最近問題になってるアレ 』　残虐非道の貴公子

ゴキブリが出ただけで警察に通報するアレも幻想入りしたようです

※紅砲

ムシの刻参り

Step

幻想風穴

——というわけで旧都まで案内お願いします

ハァ

無茶だと思うなぁ……

……

おいおい地上妖怪のクセに旧都の鬼の話題？

まったくいつも鬼は何かと話題にあがる妬ましいなぁ

じゃあリグルを旧都まで案内してくる

それに私だって鬼女なのに

ヤマメまで……

ぐぬぬ

橋姫だよ、私は鬼で姫だよ！

※橋姫は鬼女の妖怪です

ダダダッ!!
わーっ!!

私は鬼女の橋姫、地上の妖怪め、勝手に通行はさせないっ!
と、突然なにするのッ!?

妬符「グリーンアイドモンスター」
スペルカードっ!?
帰った方が良いわ、輝かしい光の注ぐ地上にね
Spell Card Attack!!

いつものだ…
Oh…
あーもー、またパルスィの面倒なスイッチが入っちゃったよ

蛍符「地上の恒星」

蛍符

それなら——

ザザッ

それなりの覚悟が出来てるんでしょうね！

ふん。舐められたもんねっ！

花咲爺

花咲爺「華やかなる仁者への嫉妬」

くっ、激しくはないのに面倒臭い弾幕ね

あのさぁ

……リグルの弾幕が簡単なのよ

本人が鬼って言ってるのだから、豆ぶつけてみたら？

！

それだ！

ジャリッ

地底に住む蟲達よ！

Graze

炒り豆バグストームっ!!
バシッ!
しまっ!!
バシッ!

くっ!!
鬼は外っ!

うわー、豆でやられたー
これで私も立派な鬼です!
通してくれそうだけど、どうする?
鬼を退治したみたいだからもう帰るよ
わけわかんね

え!?
ニタァ~

おこさまりさ
と
りぐる
←猫舌
ふー
ふー
NO!
ご
く
んちゅ
へへん
ごくん
りいち

ナズーリン！
ご主人ー
もしかして向かえに来てくれたの？
ちゅっ
ありがとう
いつもご苦労様
3
32

好きだよ
と言う
本が出るんだ
例大祭だね
えへっ
既刊もあるの？
ああ
3冊あるよ！
新刊は「ナズーリンのご主人はリグルでよろしかったでしょうか？」の予定だ
グッズは「リグルパズル」とかもあるぞ！
ふじわらさん
例大祭た 31b にてリグルメイン漫画４冊（たぶん）
置いてます。グッズもあるよ！
遊びに来てね！
無事にたどり着いたら、の話だがな！
宣伝するとはえらくなったなー
オイコラ。
サークル名：OLDLOCK　やってる数字：13

2011.03.13
第八回博麗神社例大祭
た－31a『大和芋』
多分きっとおそらく
ミスティア×リグル。
冬コミ発行の幽リグ本も
少し持って行きます。
よろしくお願いします。
貴キ

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

あ、来た！

ぽり０６５５　*p2*

初めまして。今まで遠くで見てるだけでしたが、楽しそうだったので参加させていただきました。
リグルは素直な後輩キャラがすごーく似合うと思うのですが自分だけでしょうか。

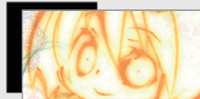
例大祭のお知らせ

13　*32p～33p*

13さんの貴重な鉛筆画が見れるのは例大祭の締め切りに追われているこのシーズンだけ！

リグルともこたんとけーね

ぼこ　*8p*

桜餅の葉っぱは食べない派です。

例大祭の宣伝

貴キ　*34p*

宣伝失礼しました。こうやって告知しておけば原稿せざるを得ない…宜しくお願いします。

読み方が分からなくてググった人は公式RT

preludenano　*9p～10p*

受験生のみすちーは英単語の勉強をしています。ってゆーかー、ルーミアとかミスティアとかが女子高生ってマジありえなくなくね？チョーMMって感じ～！

表紙

小崎

春巻きが食べたい。皮がバリバリっとしてる奴じゃなくて、昔がっこの給食で食べたなんかふにゃっとしてる春巻きを。
あと、伊勢エビも食べたい。

無題

草加あおい　*11p～13p*

この後リグルさんがもみくちゃにされて生死の境をさ迷うようなオチを考えましたがクロツクさんの作風と被りそうなのでお蔵入りですw　例大祭は「おー18b　七輪大社」でゆかれいむ本を予定しています。過去に出したリグル本も持っていくと思いますので、未見の方はよろしければお立ち寄りくださいませ。

東方茶湾虫

クロツク　*14p～15p*

ケイチツの意味が最初分からず、蟹の種類だと思ってました。
虫の目覚めというか今回は愛の目覚めということで…。
めずらしくリグルが無事！

ムシの刻参り

Step　*26p～30p*

またしても一ヶ月遅れました、申し訳ない。例大祭参加します（た-37ｂ）誰か１時間でよいので売り子を手伝ってください、チケットお譲りしますので、本当お願いします

ほっとここあ

イリイチ　*31p*

小説「鉄道員」での好きなシーンをイメージしました。
まだまだ寒くて雪も降っていますが、お部屋の中でのんびり春を待ちたいと思います。

NEXT▶ 次号4月号は3月22日(火)発行予定！

※次号の投稿締切は3月15日(火)です。
皆様からの投稿をお待ちしています。

月刊NIGHTBUG　2011年3月号

2011年2月23日発行
企画・編集：神楽丼／小崎

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画
web配布／自由投稿参加型月刊誌

ADDA
キッカ
蛍光流動
怒羅悪
preludenano
クロツク
ぼこ
草加あおい
くろと
悠奈
ぽり０６５５
残虐非道の貴公子
非常識
13
貴キ
Step
イリイチ
小崎